

[論文]

スラヴ文化史における樽製作とその用語の史的考察

佐藤 規祥

1. スラヴ諸語における樽の名称

スラヴ諸語においては樽を表わす二つの同源の名詞がある。それらは以下に示す通り、いずれも古くから古代教会スラヴ語において用いられてきた語彙である (Słownik prasłowiański 1974, 1, 458, Срезневский 1989, 1, 202)。その一方は、ポーランド語 *beczka* 「樽」、チェコ語 *bečka*、スロヴェニア語 *bečka*、セルビア・クロアチア語 *bačka*、ブルガリア語 *бочка*、古代教会スラヴ語 *бъчка*、*бочька*、ロシア語 *бочка* などである。これらの語形に基づき接尾辞 *-ька* を伴う語形の **bъčьka* が再建される。もう一方は、ブルガリア語 *бъчва*、セルビア・クロアチア語 *bačva*、スロヴェニア語 *bečva*、ロシア教会スラヴ語 *бъчвь* などである。スロヴァキア語では対応する *bečva* が「大桶」にやや意味変化している。このようにこちらは主として南スラヴ語に偏って現れ、接尾辞のない語形に基づき **bъči*、*-ьве* が再建される。この **bъči* に二次的に接尾辞を付けた語形が前者の **bъčьka* である。また、ロシア語の例は 11 世紀以降の古代教会スラヴ語起源の *бъчва* と *бочька* が入ったものであるとみなされる。いずれの言語においてもその語義は厳密には「樽」のみでなく、「木製の側板でできた大型容器」であるので「桶、たらい」なども含意しえる。

ところで、この名詞 **bъči* はそもそも高地ドイツ語の古バイエルン方言形 **butša* (現代バイエルン方言 *Butschen* 「把手付きの小桶」) からの古い借用語であるらしい (Słownik prasłowiański 1974, 1, 458)。

以上のように、「樽、桶」を意味していたと想定される語 **bъči* は南スラヴ語を中心に分布するという事実に基づき、次のことが言えそうである。おそらくスラヴ諸族が最初に拡散したとき、オーストリア東部からパンノニア平原付近に定住したスラヴ系部族が高地ドイツ語方言を話す民族と接触して、上記の語を借用し、そこから二つの語形 **bъči*、**bъčьka* が直ちにスラヴ諸族の言語に広まり、結果としてスラヴ諸語に残ったと考えられる。

ところで、前述の二つの借用語とは別に一部のスラヴ諸語にはもう一つ、樽を表わしえる古形の女性名詞がある。すなわち、古代教会スラヴ語 *дѣлы*、*дѣльве* 「大型土製容器、甕、樽」、ブルガリア語方言 *делва* 「深い把手付きの大型土製壺、甕」およびロシア教会スラヴ語 *дѣлы*、*дѣли*、*дѣльве* である (Срезневский 1984, 1, 767, Słownik

praszlowiański 1984, 5, 215, ЭССЯ 5, 210, Георгиев 1971, 336)。これは古い -ū 語幹のスラヴ祖語 *dъly, -lъve に遡る語であり、借用語とは考えられない。古代教会スラヴ語においては先の бѣчи, бѣчка と同義であるが、使用例が比較的少ない。かなり限られたスラヴ諸語にしか保持されていない事実を考慮に入れると、スラヴ諸族の拡散する以前から、すでに祖語の段階で古語であったと考えられる。すなわち、借用語 бѣчи, бѣчка が古語 *dъly を廃したというよりは、それ以前に古語の *dъly はかなり早くからスラヴ社会の中で用いられていなかったと考えた方が妥当である。

さらに、他の印欧諸語のうちでこの古形の名詞に対応する同源語として、ラテン語 dōlium 「(ワイン用の) 大型の甕, 壺, 樽」(< *dōliom) と古アイルランド語 delb 「形」が見出される (Walde and Hofmann 1982, 364, Leumann 1977, 296)。スラヴ諸語とラテン語の語形と語義「大型の土製容器, 壺」はかなりよく一致しており、相当古くから伝わる共通の語彙であった可能性が否定できない。

ラテン語 dōlium は古代ローマ時代に主として、ワインを醸造、保存するための容器として利用されていた。古代教会スラヴ語においても дьльви вина という用例があるように、実際に *dъly がワインの保存容器を表現する語として用いるのに不自然さは感じられなかったようである (Срезневский 1989, 1, 767)。もし、このワインを保存するという用途を本来 *dъly が担っていたのだとすれば、原スラヴ社会において相当長い時代にわたりワインを醸造する文化が継承されていたことになる。

ところで、借用語の *bъci および *bъчка は樽や桶類など「大型木製容器」を区別なく表しえる。他方で、古語の *dъly はブルガリア語と古代教会スラヴ語の語義から、「大型土製容器, 壺, 甕, 樽」などさらに広く表し得る。いずれにも共通しているのは、大型の保存容器を表わすことである。確かに、両者の違いはいかにも木製か土製という素材にあるように思われるが、後者はとくに木製であることを排除していない。また、前者は密閉型の樽と開放型の桶の違いを厳密に区別しないように、単に形状の相違を規準に定めているのでもない。おそらく、むしろこれは容器の用途が第一に重視されていたのであろう。仮にそうだとすれば、古くから伝わる *dъly がほとんど廃されていた状況は、その大型容器をワインの保存に利用する必要性がスラヴ社会において消え去る傾向にあった、ということに関係しているのかもしれない。

以前、筆者はスラヴ諸語におけるワイン醸造用語に関して考察したのであったが、その中で原スラヴ人の間ではかつて一時的にワイン醸造が行われていたけれども、次第に衰退したのではないかという考えを提示した (佐藤 2014)。筆者がそのような考えに至った論拠となる事例については、第 8 節で再び取り上げることにし、次節以下ではスラヴ文化におけるワイン用の樽について言語学的、文化史的に検討することを試みたい。

2. 樽製作用語の先行研究

上掲の教会スラヴ語 дѣлы「大型土製容器, 甕, 樽」その他と対応するラテン語 *dōlium* についての詳細な語源学的検討は、すでにトゥルバチョフによって行われていた。彼はこの容器の名称が印欧祖語にまで遡及するとしたうえ、その素材がもとは土製であったとしている (Трубачев 2008, 622-627)。彼の語源学的な考察はおそらく正しいと思われる。しかしながら、筆者の考えではスラヴ祖語のかなり早い年代において、原スラヴ人はワインの熟成と保存のためにより効率的な樽の製作術を知ったのであろう。前述の通り、容器の素材よりは用途が重視されたために、その密閉型で湾曲した容器は土製か木製かの区別をしなかったはずである。さらに、それが大型の木製容器になりえたのは二次的な発達であろうと思われる。

また、トゥルバチョフは樽の製作に関連する「樽製作用語 (бондарные термины)」の多くが外部からの影響を受けずに、スラヴ語内に限って現れる事実を認めていた。そして、スラヴ文化において樽の製作が始まったのは、バルト語派のラトヴィア語がドイツ語から借用語を取り入れたのと比較するならば、はるかに早かったと論じた (Трубачев 2008, 550)。しかし、その年代論的な位置づけについては論じなかった。以下にそのうちの代表例を引用し列挙する。

「桶・樽の底板をはめる溝」の意味で例えば、チェコ語 *útor*, セルビア・クロアチア語 *utor*, ロシア語 *утор* などがあり、祖語の語形は **q-toŕgъ* が再建される。

「桶・樽のたが, 輪」の意味で例えば、チェコ語 *obruč*, ポーランド語 *obręcz*, セルビア・クロアチア語 *obruč*, ロシア語 *обруч* などがあり、祖語の語形として **ob-ŕočъ* が再建される (Machek 1971, 407, ЭССЯ 2002, 29, 111-114)。

「桶材・樽材, 桶用・樽用の板」の意味で例えば、ポーランド語 *klepka*, ロシア語 *клепка* などの語があり、祖語の語形 **klepъka* が再建される (ЭССЯ 1983, 10, 11)。

もう一つ別の「湾曲した桶・樽用の板」を意味する語として例えば、チェコ語 *duha* 「湾曲した樽板, 虹」, ポーランド語 *dęga* 「樽板」, セルビア・クロアチア語 *duga* 「虹, 桶板」, ブルガリア語 *дъга* 「弧, 樽板, 小桶用のたが」, ロシア語 *дуга* 「弧, 馬のくびき」などの語があり、祖語の **dŕga* が再建される。これはラトヴィア語 *danga* 「かど」に同源語が現れる (Słownik prasłowiański 1981, 4, 192, Machek 1971, 133)。

もし、トゥルバチョフの解釈が正しいとすれば、彼の言う「樽製作用語」はスラヴ諸語全体に見られることから、おそらく、はじめに触れたスラヴ祖語の **byci* を借用した時代に形成されたという可能性も排除できないであろう。仮にそうだとすると、一方で「大型土製容器, 樽」を意味した **dъly* が廃れていなかった時代には、少なくとも上に列挙した「樽製作用語」はまだ存在していなかったことになる。そこで、古語 **dъly* がかなり古くから木製大型容器、木樽を意味していたのであれば、それと同時代にその製作に関連する「樽製作用語」が別に存在したということが想定される。

しかしながら、トゥルバチョフはスラヴ祖語の *dъly が古くは土製容器であると見なしており、その意味では先の「樽製作用語」がスラヴ祖語の比較的新しい時代に形成されたものと考えていたのかもしれない。筆者の考えでは、樽製作に必要な工具類などの用語として認められる古い語彙は、上例のほかにもいくつか指摘することができる。とくに *sěčivo, *tesla, *skobъly, *razъ の4例は同書中に見られるものである (Трубачев 2008)。さらに、これらの4例はいずれも対応する同源語がラテン語に現れるという点で共通している。ただし、トゥルバチョフはこれらの4例のうち、*tesla のみを「樽製作用語」に関係付けたが、のこり3例はより一般的に用いられる大工用語のうちに位置付けたのであった (Трубачев 2008, 535-536, 540-541)。もちろん、この点で彼の慎重な扱いは決して誤ってはいなかった。

本論考においてはこのトゥルバチョフの考察を再検討し、これらの語彙例もまたワイン用の木樽を製作する上で用いられた用語の可能性があるという仮説を立て、以下の第3, 4節では文化史的側面にも配慮し論じたい。

3. ワイン樽の製作法

ワイン樽はブドウを醗酵、熟成させるのに最適な容器として一般に利用されるものである。ヨーロッパにおいてどれほど古くから樽の製作が行われていたかについては、考古学的観点からの証拠が十分に得られないためによく分かっていない。樽が出現する以前の太古の時代においては、土製の壺や甕、ときには革袋を用いて、ワインが醸造、貯蔵されることもあった。ただし、壺や甕、革袋などは、ワインの醸造以外にも利用されることがある。樽の素材には主としてブナ科のオークの一種 (Quercus robur) が用いられる。木製の樽の利用は本来、ワインをその中で醸造、熟成させて、長期の保存を目的としたものであった。それゆえに、スラヴ祖語において樽を表す語が想定されれば、原スラヴ人がワイン醸造を行っていたことを裏付ける論拠の一つになりえる。

樽の構造は簡素であるが、実に繊細である。胴は側板がわいたと言われる細長く湾曲した20枚余りの板で構成され、両端の底蓋は鏡板かがみいたと言われる円形に組んだ板であり、側板は帯鉄おびてつまたは木製のたがで締め付けて固定しているだけである。ただし、帯鉄の普及は産業革命以後の比較的新しい時代になってからのことであった。そればかりか、現在においても必ずしも利用されるものではないようである (石村 1997, I 85)。そのため、それ以前のたがは通常、コリヤナギかハシバミの木の枝か蔓を利用し、樽の半分近くまでしっかりと締め付けられていたらしい。これは古代ローマ時代のレリーフなどからも知ることができる (石村 1997, III 55,59,98)。また、リュバコフによればロシアにおいても、たがにはブドウかヤナギの蔓が利用されていたらしい (Рыбаков 1969,185)。

ビール樽はワイン樽とは多少異なる構造を持つ。というのは、ビールは醗酵すると樽の内圧が高く上昇するので、側板の変形を抑止するために、内側に湾曲した底板で補強し、厚い側板を用いた頑丈な造りの樽が利用される。したがって、ビール樽にしっかりした金属のたがを使用するのは理に適っている。その用途と構造的な違いは、樽の種類別に別の名称をつける根拠にもなりえるかもしれない。その意味では、すでに触れた高地ドイツ語起源の借用語 *bъцька, *bъći がワイン樽と区別して、ビール樽として用いられていたという可能性も否定できない。

樽の製作工程もまた決して複雑ではないが、実に緻密な作業である。これを松村とローガン、及び工具について詳細に検証した石村の説明を参考にし、簡略に記すと以下の通りである（松村 2000, 147, ローガン 2008, 198, 石村 1997, II 8-33）。

まず剥皮した原木から切断した丸太を得ると、木槌となたを用いて四つ割りにし、側板用の柁目板を放射状に割って採取する（ローガン 2008, 204, 松村 2000, 417）。次に、側板の加工では、成形する前にあらかじめ斧の一種で荒削りし、樽の表側の凸面と裏側の凹面を引き削りかんなで削り出す（石村 1997, II 197 図）¹。この作業では、側板を切削台といわれる作業ベンチに置いてまたがり、かんなを引く。側板の両端は厚みが残るが、中央部は薄く削り取ることで、あとで熱による曲げ加工を容易にする。このあとはとくに難易度の高い重要な作業で、隣り合う側板と接合する側面を正確な角度に揃えるため、正直台しょうじきだいという片方に脚がついて傾斜した長いかんなの一種で切削する。その切削作業で出たかんな屑を集めて燃やすと、この火を囲むようにして、水で湿らした側板を樽の仮組みをした状態に置く。熱で曲がりやすくなったところで、樽の形になるよう上から仮たがの輪を叩き入れ、成形する。全ての切削面が仕上がったら、手斧で側板の両端に樽底の鏡板を嵌め込むためのアリ溝を彫り取る²。樽の内面が滑らかになるように、かんなで削り、つぎ口をくり抜き、栓を嵌め込む。両端のアリ溝に鏡板を嵌め込み、たがを締め直せば完成する³。工程の最後で木槌と締め木という道具を用いて、輪または帯鉄を叩き入れる⁴。

樽を製作するための工具の種類は主として木槌、なた、かんな類、手斧、作業ベンチなどが認められる。驚くべきことに、古代ローマ時代の樽職人が使っていた工具は、19世紀に至るまで基本的に同じであったらしい（ローガン 2008, 202）。上記のことを念頭に置き、樽の製作作業において重要と見なされる工具や部材の名称を中心に見据えて、5節にて語源学的視点から検討したい。

4. 古代ローマ時代における樽製作

古代ローマでは先史時代からワイン醸造が発達していたことが知られる。今日では樽にはオーク材が使用されるが、古代ギリシア、ローマなどでは同じブナ科のクリその他の木材も使用されていたらしい。幾世紀もの間、古代ローマにおける交易上の主

たる商品であったワインの貯蔵には、樽よりもアンフォラというギリシア様式の素焼きで把手付きの大型壺が多用された。それが、ガリアに進出した後、アンフォラに代わる樽の使用が一般化したとされる（松村 2000, 404）。この事実はあたかもそれまでローマ人が樽の製作術を知らなかったかのようなのであるが、おそらく実際はそうではなく、イタリア本土においてはすでに樽用のオーク材が不足していたからと考える方が正しいであろう。それゆえに、紀元後にガリアを属領として支配した結果、未開の土地で豊富なオーク材を手中に入れることが可能となり、このことが樽の普及に至ったと思われる。確かに、ワインで満たされたアンフォラは重くて壊れやすいため、船舶による海上の大量輸送には便利であったが、その反面、荷車に積載した悪路での輸送には不向きであった。

古典期の作家等は自らの経験に基づき、ブドウ栽培術やワイン醸造術についての詳細な指南書または記録をいくつも残している。それにもかかわらず、樽の製作術については全くと言っていいほど触れられていない。その理由は、一つには樽そのものが稀であったということもあるが、それだけでなくも特殊な技能を要する樽の製作は、専門の職人の仕事としてかなり早くから分業化されていたことが大きな理由であったのではなかろうか。それゆえに、社会的地位の高い作家らはもとより一般人は常に市場で樽を入手していたために、そもそも製作術についての詳しい知識がなかったからだと推測される。ただ、一度使用したワイン用の樽や壺は幾度か再使用されたのであった。残念ながら以上の通り、古代ローマにおけるワイン樽の具体的な製作法とそのためのものである工具に関しては不明な点が多い。次章以下においては、語源学的な視点から「樽製作用語」について少しでも明らかにしたいと思う。

5. 「樽製作用語」の対応例

3節で明らかにしたような、樽の製作工程で使用される工具や部材などをツールバチョフにならい「樽製作用語」と名付け、以下において「栓」「たが」「手斧」「両手かんな」などの意味に関係付けられそうな語彙をその検討対象とする。これらは樽製作技術の継承のために使用された語彙と考えられる。これらの用語の語源学的な検討に基づき、原スラヴ文化におけるワイン樽の製作の一端を可能な限り解明したい。

以下、スラヴ諸語において対応する語彙は代表例のみ取り上げ、各言語の例を網羅しない。そのあと括弧内に想定されるスラヴ祖語の語形を続ける。次いで、ラテン語の対応例とその他の印欧諸語の代表例のみを示す。先行する言語の例と語義が同一の場合、とくに記さない。

- (1) スロヴェニア語 paz 「板壁」、教会スラヴ語 пазь 「丸太か板に別の丸太か板を固定するために彫り込んだ溝、アリ溝」 [Срезневский 1989, 3, 862], ロシア語 паз

- 「板に彫り込んだ嵌め込み用の溝」(< *pazь < *pāĝ-).
- : ラテン語 *compāgēs* 「接合, 結合, 合わせ目, 骨組」, *pangō* 「固定する, 結びつける, しっかりと差し込む」, ギリシア語 *pēgnūmi* 「打ち込む」, 古期高地ドイツ語 *fuoga* 「継ぎ目」, *fah* 「塀, 仕切り」 (> ドイツ語 *Fach* 「家具の仕切り」), 中期アイスランド語 *āge* 「成員」 (< *pāĝ-)⁵.
- (2) セルビア・クロアチア語 *pluta* 「栓」, ブルガリア語 *плута, плуто* 「(コルク) 栓, 漁網のうき」, ロシア語 *плутиво* 「浮子」 (< *plutivo, *pluta, *pluto < *plout-).
- : ラテン語 *pluteus, pluteum* 「(小屋の) ひさし, 寝台の肘掛」 (< *pluteios, *pluteiom : Ernout and Meillet 1979, 518, Leumann 1977, 287), リトアニア語 *plautas* 「巣箱の段」, 古アイスランド語 *fleyðr* 「梁」.
- (3) セルビア・クロアチア語 *sječivo, sječiva* 「刃」, ブルガリア語 *сечиво* 「道具」, ロシア教会スラヴ語 *сечиво* 「斧」 (< *sěčivo < *sěkīwom : Варбот 1969, 85).
- : ラテン語 *secivum* 「切片」 (< *sekīwom) (Meillet 1961, 371, Walde and Hofmann 1982, 504).
- (4) チェコ語 *skoble* 「両手かんな」, スロヴェニア語 *skoblja* 「かんなぎ」, ロシア語 *скобель* 「両手かんな」 (< *skob(ь)ь/-lja < *skob(i)l-).
- チェコ語, スロヴァキア語 *skoba* 「鉤, 掛け金」, セルビア・クロアチア語 *skoba*, スロヴェニア語 *skoba* 「平板」, ブルガリア語 *скоба* 「把手」, ロシア語 *скоба* (< *skoba). (Machek 1971, 546).
- ロシア語 *щепло* 「木屑, 松の木端」 (< *ščeblo < *skeblom).
- ロシア語 *скоблить* 「表面を削る」 (< *skobliti).
- : ラテン語 *scobis* 「かんな屑」, *scobina* 「やすり」, *scabies* 「手触り, 表面のざらざらしていること」, *scabō,-ere* 「(表面を) 削り取る, 引っ搔く, こする」 (Ernout and Meillet 1979, 597), 古アイスランド語 *skafa* 「鉄製の馬櫛」, ゴート語 *skaban* 「削る, 引っ搔く」, リトアニア語 *kablys* 「鉤」, *skabiu, skobti* 「引っ搔く, 削る」.
- (5) チェコ語 *tesla* 「手斧」, セルビア・クロアチア語 *tesla*, スロヴェニア語 *teslo, tesla*, ブルガリア語 *тесла*, ロシア語 *тесла* (< *teks-(s)lom, *teks-(s)la) (Meillet 1961, 415, Варбот 1969,76).
- : ラテン語 *tēlum* 「槍, 矢, 剣」 (< *teks-lom), 古期高地ドイツ語 *dehsala* 「斧」.
- (6) ロシア語 *вясло, вязло* 「麦わらを束ねる荒縄」 (Словарь русских народных говоров 6, 1970, 75,79, Meillet 1961, 414) (< *vęz-lo ~ *vęz-slo < *wnĝ-(s)lom)⁶.
- : ラテン語 *vinc(u)lum* 「ひも, 縄, 草紐; 拘束」, *vincio* 「縄で縛る, 巻き付ける, くくる, 固く縛りつける」 (< *vinclom < *wnk-(s)lom), ギリシア語 *ίψον* (Hesychius) (Pisani 1982, Ernout and Meillet 1979, 736)⁷.

上例の通り、樽製作用語としてスラヴ祖語に想定されえる語彙の総数は少ないけれども、それらに対応する同源語がいずれもラテン語に現れる。それ以外の印欧諸語はゲルマン語派、ケルト語派、バルト語派、ギリシア語に少数の例が現れる。それらのうち (1) (3) (4) (5) の対応例は、スラヴ語派とイタリック語派 (ラテン語) の祖語がかつて接触した時代において平行発達した語彙であるとして、トゥルバチョフによって提示されたものであった。第2章でも述べたように、彼はそれらを木工技術の文化を反映する実例として観察していたのである (Трубачев 2008, 535-536, 540-541)。

実際、語形が接尾辞も含めて共通しているため、単なる偶然で個別に発達したとは考えられないような (3) (5) (6) の例もみられる。すなわち、(3) の対応例では、スラヴ祖語 *sěč-ivo とラテン語 *sec-īvum* がいずれも同一の接尾辞 *-īwo- で形成されている。(5) の対応例では、スラヴ祖語 *tes-(s)lo とラテン語 *tē-lum* (< *teks-lom) がいずれも同一の接尾辞 *-lom または *-slo- で形成された可能性が高い。(6) の対応例では、スラヴ祖語 *vež-lo とラテン語 *vinclum* (< *vink-lom) が同一の接尾辞 *-lom で形成されたと認められる。とくに (3) の接尾辞 *-īwo- はラテン語では生産性があったが、スラヴ諸語では目立った生産性は見られず、比較的少数の名詞に現れることから古形とみなすことができよう (Meillet 1961, 371, Барбот 1969, 85)。

このように上掲の (1)~(6) の対応例の語は、樽製作の技術を継承するために必要な工具や部材などに関連付けられる用語と認められるが、それらの用語はイタリック語派とスラヴ語派の両祖語の間で同時期に平行して発達したものではないかと考えられる。

6. 借用の可能性が排除される根拠

ローマ時代以後のラテン語からスラヴ祖語への借用の可能性は、音声、形態、語義のいずれかの点で互いに異なることから、まずありえない。実際、上掲の対応例にはこれまでに借用語として解釈されたものはなかった。もっとも、それはスラヴ・イタリック語派間での直接的な言語接触が想定されることがなかったことが理由の一つでもある。この点を考慮に入れ、双方の祖語期における言語接触に起因する借用の可能性につきここで再検討することは、無駄ではないと思われる。

まず第一に音韻論的側面において、語幹の印欧語的な古い母音交替の相違が認められる例として、(2) スラヴ祖語 *plutivo (< *ploutīvom): ラテン語 *pluteus*, (3) *sěčivo (< *sěkīwom): *secīvum* が指摘される。また、スラヴ語派などに特徴的な硬口蓋音の二次的な変化 (*ġ > *z) が認められる例として、(1) *razь (< *pāġ-): (com-)pāġēs, (6) *vežlo : *vinclum* が指摘される。このため、これらの対応例の間には、互いの借用の可能性が排除される。

第二に形態論的側面では、接尾辞の相違が認められる例として、(4) のスラヴ祖語

*skob-a, *skob-(ъ)ь, *ščeb-lo : ラテン語 scob-ina, scamnum (< *skab-nom) が指摘される。

他方で、名詞を派生したもとの動詞の存在が認められることである。スラヴ祖語内において独自に形成されたことを示している例として、それぞれの名詞とその動詞を記すと、(2) *plutivo < *pluti, *plovŕ 「浮く」、(3) sčivo < *sčkti, *sčkŕ 「切斷する」、(5) *teslo < *tesati, *tešŕ 「削る」、(6) *vęzslo < *vęzati, *vęžŕ 「縛る」がある (Meillet 1961, 371, 414, 415)。

同様に、ラテン語においても、(1) compāgēs は動詞 pangō に接頭辞 con- が付加された compingō 「詰め込む、組み立てる、固定する」から形成された名詞であることは間違いない。さらに、(3) secivum は動詞 secō, secāre 「切る」から、(4) scobis, scobina, scabiēs などは動詞 scabō, scabēre 「削り取る」から、(6) vinculum は vinciō, vincire 「固く縛り付ける」から形成されたものである。

以上のような理由から、検討対象になった個々の用語につき、両言語の間で互いに借用が生じたとは考えられないと言える。

7. 樽製作用語の原義

本章では個々の用語が祖語のより古い年代において意味していたと想定される語義について順に検討したい。

例 (1) の古代教会スラヴ語の пазь の語義が「丸太か板に別の丸太か板を固定するために彫り込んだ溝、アリ溝」であり、木工技術的に特定の部位を意味している。これは単に木組みの接合部を指したというよりも、ラテン語の動詞 pangō の意味「固定する、しっかりと差し込む」が表わすように、本来は「板と板を隙間なくしっかりと固定した接合部」を意味していたと推定される。樽や桶の側板に鏡板を嵌め込む「アリ溝」の構造はまさにそのような仕組みになっていた (Рыбаков 1969, 185)。スラヴ諸語においては日常的に用いられる語彙ではなく、古い木工技術の用語として保持されてきた。また、同じ語基から形成された派生語もわずかに確認される。すなわち、古代教会スラヴ語の пазьникъ 「アリ溝を彫り込むための道具」、ロシア語の пазовик 「さねはぎ鉋」、пазовать 「(材木面に) 細長い溝を彫る」である。これらはいずれも同一の「板面に溝を彫り込む」作業で用いられる動詞とその工具を指す名詞である。いずれも、樽・桶職人の間で用いられる技術用語であったために、一部のスラヴ語にのみ辛うじて保持されることになったと考えられる。したがって、スラヴ祖語の早い時代から、おそらく *pazь の語義は「アリ溝」を意味しえたと推定される。ラテン語で接頭辞を伴わない名詞が消失したのは、その技術的な用語としての性質が強く、一般に使用されなくなったのかもしれない。

例 (2) のスラヴ祖語の名詞 *plutivo は、動詞 *pluti *plovŕ 「浮く」(古チェコ語

plúti plovu) の語基から接尾辞 *-tivo を伴って形成されたことが明らかである。この名詞は確かに、(3) *sěčivo と共通する接尾辞 *-ivo に特徴付けられるが、厳密には異なる。というのは、動詞が母音で終わる語基 *plu- の場合には、接尾辞 *-tivo が付くが、それが子音の場合には接尾辞 *-ivo が付くからである。他にもこれと同様の例が、動詞 *stati 「立つ」から形成された名詞 *sta-tivo 「機台の支柱」の場合に見られる。ちなみに、後者の名詞はラテン語でも平行発達が確認され、動詞 stō, stāre 「立つ」の語基に接尾辞 -tivus を伴う形容詞 stativus 「立っている、定住の」に厳密に対応する (Трубачев 1975, 16)。

スラヴ諸語とラテン語の双方で対応する (2) の名詞は、意味論的な関連性が欠けるほどの語義の相違、発達が著しい。そのために、それらに想定される原義とそこからの「漁網の浮子」「(コルク) 栓」や「(小屋の) ひさし、寝台の肘掛」などへの変化、発達を説明するのは確かに難解である。しかしながら、これらの一見まとまりのない同源の名詞は、それぞれが別々の用途に利用された同一物を指示しているにすぎないことに気付きさえすれば、解決できそうである。その用途に関して古代ローマ時代の博物学者、大プリーニウス (Gaius Plinius secundus: A.D. 23/24~79) の『博物誌 (Naturalis historia)』16 卷 13 章 34-35 節における次の記述が、我々の疑問を一度に解き明かしてくれる (Pliny 1960-1968)。

Suberi minima arbor, ... : usus eius ancoralibus maxime navium piscantiumque tragulis et cadorum obturamentis, praeterea in hiberno feminarum calceatu.

「コルクカシは非常に小振りな樹木で、(中略) その樹皮は主に船の錨や漁夫の曳き綱や、壺の栓、それに女性の冬靴のかかとに使われる。」

Cortex et fagi,tiliae,abietis,piceae,in magno usu agrestium. vasa eo corbesque ac patentiora quaedam messibus convehendis vindemiisque faciunt atque proiecta tuguriorum.

「オーク、ボダイジュ、モミ、トウヒの樹皮は穀物やブドウの収穫期に運搬するための平たく伸ばした容器や小屋のひさしに使われる。」

上記の引用文は古代ローマ時代において、コルクカシ (suber) を始めとしたオーク類その他の樹皮には水を吸わず浮力、弾力があることから、その性質を利用して、壺の栓や漁網の浮子、小屋のひさし、婦人用冬靴底などの様々な用途に利用されていたことを説明したものである。そこで、一般的な樹皮を意味する語に替えて、オークの樹皮には、名詞 pluteus, pluteum が用いられたと推定される。このことから、スラヴ祖語とラテン語の祖語の原義に「オークの樹皮」が想定されるであろう。その後、個々の言語において、オークの樹皮を利用した「漁網の浮子」、「小屋のひさし」、「栓」などの指示する物の名称に意味が定着した結果、言語により語義が分化したと説明さ

れる。

(3) *sěčivo の意味については、セルビア・クロアチア語の「刃」と古代教会スラヴ語の「斧」のうち、どちらが原義を留めているのか推定するのは難しい。けれども、これは動詞 *sěkti *sěko 「切断する」から形成された名詞であることに配慮すれば、本来は板材を切断する用途の一種の「斧」であったと推定できる。これは側板の表面を荒削りする作業に用いられる工具、例えばハチェットと呼ぶ斧の一種の名称だとすれば、うまく説明がつく(石村 II 1997, 26)。さらに、ラテン語 *secivum* 「切片」も同様に動詞 *secō, secāre* 「切る」から形成された名詞であることから、おそらく「斧」を意味していたのが変化して、それをを用いた作業で生じた木端を指したのではなからうか。

(4) の例は、スラヴ諸語とラテン語の双方においてそれぞれ対応する動詞とその複数の派生名詞がそろって再建される。ただし、厳密にはスラヴ祖語の動詞 *skobliti 「(板の) 表面を切削する」は名詞を派生する接尾辞要素 *-l- を伴うゆえに、むしろ名詞 *skoblъ 「両手かんな」から形成された語と見なすべきであろう。それゆえ、ラテン語の動詞 *scabo* に対応すべき動詞は、かなり早い年代にスラヴ祖語で失われたことになる。したがって、その失われた動詞の役割を補うようにして、名詞 *skoblъ から動詞 *skobliti が形成されたと考えることもできる。

ラテン語の *scobina* 「やすり」は動詞 *scabō* 「(表面を) 削り取る」の語基から接尾辞 *-ina を付加して形成された名詞であるので、スラヴ祖語の接尾辞 *-(b)l- < *-il- とは厳密には異なる。いずれの名詞にも共通する原義が「板の表面を滑らかに削る工具」または「両手かんな」ではなからうか。

次に、「かんな屑, 木くず」を表す名詞として、スラヴ祖語の *ščeblo < *skeblo とラテン語の *scobis* < *skobis が揃って再建される。上の例と同様に同一の動詞語基から形成された、接尾辞の異なる名詞である。これは両手かんなや手斧などで「削り落とした木くず」を指したのであろうが、3節で触れたように単なる廃物ではなく、集めて燃やした熱で樽の側板を曲げるのに利用する有用な材料になりえた。

さらに、スラヴ諸語で「把手」「鉤」「平板」などを意味する名詞は、かなり意味が変化しているのが明らかである。鉤は木材を引っ掛けて固定するための工具である。ラテン語 *scabō* 「(表面を) 削り取る」に対応する動詞がスラヴ諸語には検証されなけれども、木材の表面を削り取る作業に関係し、両手かんなとは異なる工具であることは推測できる。そこで、3節で触れた両手かんなを用いて切削するために板を固定する工具である、「作業ベンチ, 切削作業台」を指したのかもしれない。スロヴェニア語の *skoba* 「平板」の語義は、正直台のような、かんなの付いた細長い板から発したものかもしれない。

他方で、ラテン語には動詞 *scabō* 「削り取る」から接尾辞を付加して形成された名

詞 *scamnum* (< **scab-nom*) 「椅子」とその指小形 *scabellum* 「腰掛, 足台」がある。これらが二次的に椅子の語義に変化したのは明らかである。これらとは別にラテン語には本来の座するための「椅子, 腰掛」を意味する名詞 *sella* (< **sedla*) がある。そこで、*scamnum* は、もとは跨って切削作業をするための「作業ベンチ」を指していたものが、用途を一般化し「ベンチ, 腰掛」に転義したと説明することができそうである。

以上のように、厳密には接尾辞の有無の相違が認められるけれども、スラヴ祖語とラテン語に共通する原義として、「切削用の作業ベンチ」「切削用作業台」が想定されるであろう。

こうして、両語派において同一の語基 **skob-* ~ **skab-* からいずれも板の切削作業に関わる対応語彙として、「両手かんな」「かんなくず」「切削用作業台」のそれぞれが平行して形成された事実の特筆に値する。

例 (5) **tesla* は、スラヴ諸語の語義から原義は「手斧」に間違いはない。ルイバコフによるとロシアの *тесло* 「手斧」は木の加工に広く応用され、鉄製の鋏に似た形状をもち、板の表面を滑らかにするための工具であり、板の繊維に沿いゆるやかな凹面の跡を残すという (Рыбаков 1969, 183)。また、考古学ではその発掘例がよく知られ、10 世紀から今日までその形態を保持しているという。これと同一と察せられる手斧は、柁目板から側板を削るため、または側板の両端に溝を掘るために利用する工具である。すなわち、いずれの説明からも、板材の表面を湾曲した刃で細かく削り、側板のような凹面を得るための工具であることがわかる。確かに、単に手斧と言ってもその用途と形状は多岐にわたる。けれども、ここで想定される手斧は、とくに樽や桶に用いられる湾曲した板の製作に適した工具であったのではなかろうか。

ラテン語 *telum* 「槍, 矢, 剣」は本来意味していたはずの工具が、二次的に武器としての役割に変化してしまった例であろう。

以上のことから、ラテン語とスラヴ諸語の両者の原義が「(板を削るための) 手斧」であったと想定することができる。

例 (6) のスラヴ祖語の語形 **vez(s)lo* 「荒縄」はラテン語 *vinc(u)lum* 「紐, 縄, 革紐」と語義の相違があまり目立たない。ラテン語の語義が示すように、その素材は重要でないのかもしれない。次の詩人ティブッルス (Tibullus: B.C.54~19) の著作からの引用例 (2 巻, 2 章, 28 節) は土製ワイン壺の密封に利用されていたことを示すものである (Catullus, Tibullus, Pervigilium Veneris 1976)。

... et Chio solvite vincla cado.

「そして、キオス産の (ワイン) 壺の紐を緩めなさい。」

ここではどのような素材の紐でどのように壺に巻き付けられていたのか、前後の文

脈からも明確ではない。単に文学的に比喩的な表現をしたものかもしれない。さらに、この *vinclum* が樽用のたがを指しているとは思えず、当時たがに利用されたかも定かではない。古代ローマ時代に樽のたがはハシバミやヤナギの枝、蔓が利用されていたらしいので、この名詞がそのたがを指す場合に充てられていたとしても不自然ではないが、残念ながら筆者には実例が見当たらなかった。

一方、名詞 *vinclum* は動詞 *vinciō* 「固く縛り付ける」の語基から接尾辞 **(s)lo* を伴ない形成されたものである (Ernout and Meillet 1979, 736)。大カトー (Marcus Porcius Cato: B.C.234~149) がワイン醸造法を記した著書『農業論 (De Agri Cultura)』の 39 章 1 節には、ワイン壺や樽をたがで締め付けて固定する作業の表現に、動詞 *vinciō* を用いた実例が観察される (Cato 1967)。

Dolia plumbo vincito vel materie querneavere sicca alligato.

「壺は鉛できつく絞めよ、またはよく乾かしたオーク材で巻きつけよ。」

この例はたがに鉛またはオーク板が利用されていることを示している。木の樽自体がまだ普及していなかったはずの時代であり、残念ながら筆者の調べた限りでは、木樽にたがを締め付ける場合の表現の実例を観察することはできなかった。

言うまでもなく、動詞 *vinciō* の語義は非常に一般的で日常的に広く用いられる。同様のことは、スラヴ諸語に対応する動詞の場合にも言える。名詞 **vęslo* は動詞 **vęzati* **vęžq* 「結ぶ, 縛る」(チェコ語 *vázati*) から、ラテン語と同様に接尾辞 **(s)lo* を付加して形成されたのであった (Meillet 1961, 414)。いずれにおいても一般的な意味を持つ基本的な動詞であるにもかかわらず、これらの動詞の同源語は、他にギリシア語の断片的な例が記録される以外には見当たらない。そればかりか、とりわけ形態と語義が厳密に一致、対応する名詞が両語派にのみ現れるのは、特筆するに値する (Pisani 1982, 155)。

以上のことから、スラヴ諸語、ラテン語ともに対応する動詞の原義は「しっかりと、固く縛りつける」であり、名詞のそれは「(縛るための) 紐, 縄」であったと考えられる。この用語は確かにもっと様々な状況においても用いられたに違いないが、このような特定の作業状況において必要な用語であったことが、辛うじてロシア語方言に保持されたとも言えそうである。例えば樽の側板を合わせてしっかりと締め付ける作業においても、重要な用語になりえたと考えられる。

8. ワイン醸造用語

かつて筆者は上記の例に観察されるような、スラヴ諸語とラテン語の間に見られる語彙面での等語線について検討した (佐藤 2012, 2014)。すなわち、ワインを醸造す

る作業において必要であると考えられるひとまとまりの語彙を「ワイン醸造用語」として定めたところ、それらの用語の同源語がスラヴ諸語とラテン語の間に認められたのであった。こういった用語は単なる借用語とは考えられず、両語派の祖語の時代に一時的に接触していた際に発達したものであると説明した。本節においてはその実例につき以下に代表例のみを引用し示したい。

- (1) *droždъja > チェコ語 droždí 「酵母」, ロシア語 дрожжи.
: ラテン語 fracēs 「オリーブ・ブドウの搾り滓」.
- (2) *glъt(ъk)ъ > チェコ語 hlt 「一杯」, ロシア語 глоток 「一飲み」.
: ラテン語 glūtus 「一飲み」.
- (3) *glъtati > チェコ語 hltati 「飲み込む」, ロシア語 глотать.
: ラテン語; glūtiō 「飲み込む」.
- (4) *košъ > チェコ語 koš 「編みかご」, ロシア語 кош 「円錐籠」.
: ラテン語 quālum 「編みかご, 詰めかご」.
- (5) *koš(e)ь > 古ポーランド語 koszela 「編みかご」, ロシア語 кошель.
: ラテン語 quasillum 「小型の編みかご, 詰めかご」.
- (6) *krida > 下ソルブ語 kśida 「ふるい」
: ラテン語 crībrum 「ふるい」.
- (7) *кълкъ > スロヴェニア語 kolk 「太腿」, ロシア語 колк 「牛角下の骨」.
: ラテン語 calx,-cis 「かかと」, calcō 「踏みつぶす」.
- (8) *lotokъ > ポーランド語 lotok 「小麦用の樋」, ロシア語 лоток 「雨どい, 樽の板材」.
: ラテン語 latex,-icis 「水, 流水, 液, 泉, ワイン」.
- (9) *ръкъlo/-ъ > スロヴェニア語 rəkəl 「樹脂」, ロシア語 пекло 「灼熱」.
: ラテン語 pix,-icis 「樹脂, 松脂」, picul 「樹脂」.
- (10) *sorъь > チェコ語 「鼻汁, つらら」 soper, セルビア・クロアチア語 sopolj.
: ラテン語 sapa 「煮詰めたワイン・ブドウ液」.
- (11) *torкъ > チェコ語 trak 「草ひも」, スロヴェニア語 trak.
: ラテン語 torculum 「圧搾機」.
- (12) *pěna > チェコ語 pěna 「泡」, スロヴェニア語 pena, ロシア語 пена.
: ラテン語 spūma 「泡, 浮かす」.

上記の「ワイン醸造用語」の原義を個別に想定する議論については、すでに筆者が詳しく記したので、ここで繰り返すのは避けたいと思う (佐藤 2014)。その対応例から推論できることは、筆者の考えではおそらく、原スラヴ人と原イタリア人が遠い過去の一時代に密接に文化接触をして、共にワイン作りをしていた事実を裏付けてい

るのではなからうか、というものである。もし仮にそれが誤っていなければ、ワイン樽を製作するのに必要とされたはずの一握りの「樽製作用語」もまた同様に、先の「ワイン醸造用語」と同時代に並行して発達したという可能性も想定されるのではなからうか。

9. 容器の用途

冒頭で論じたように、古代教会スラヴ語においては *dъly と *bъčĭ, *bъčьka との意味の使い分けは明瞭ではなく、競合して用いられていた。それにもかかわらず、これらのうち南スラヴ語以外では、古代教会スラヴ語起源のロシア語の例を除けば *bъčьka のみが伝わった。これがもし単なる偶然でなく、そこに区別される意味があったとすれば、*bъčĭ はおそらく南スラヴ語域でのみ必要とされた用途の大型容器、または木樽を意味したことが推測される。しかも、古来よりワイン樽またはワイン用土製容器を意味した *dъly と同じ南スラヴ語に広く分布したことは、*bъčĭ もまたワイン用の容器に使用された可能性は排除できない。あるいは、古くから伝わる樽とは異なり、ビール樽のような厚い側板と金属性のたがを用いた造りの頑丈な構造の樽をドイツ文化圏から導入したことにより、採り入れた借用語であった可能性もありえる。他方の *bъčьka はそれより小振りであり汎用性のある容器を意味したのであろう。この構造の異なる樽の製作のために、第2節で触れた *q-torъ 「桶・樽の底板をはめる溝」、*ob-rqčь 「桶・樽のたが」、*klepьka 「桶・樽用の板」などの比較的新しい樽製作用語が形成されたとも考えられる。

10. 結語

本論考においては、スラヴ諸語に伝わる樽や桶を表す語 *bъčĭ, *bъčьka, *dъly の語源的な起源とそれらの用途について論じ、その製作に必要なとされる工具や部材などを表す「樽製作用語」について解明することを試みた。検討対象に挙げた個々の用語がかつて意味したと想定されえる語義については、不確定な点が少なくないために仮説の域を出ないけれども、おおよそ以下の様な結論が導かれる。

原スラヴ人が比較的古い年代に原イタリック人と文化的、言語的に接触したことを契機として、土製の壺に加えて大型の木製の樽を製作し始めたと考えられる。このことは、スラヴ祖語における *dъly と対応するラテン語の *dōlium* の語義「土製または木製の大型容器」から想定される。おそらく、木製容器の利用はワインを醸造、保存するという用途を満たす目的で、樽の製作に必要な工具や技術を発達させたことが可能にしたのであろう。しかしながら、やがて原スラヴ人の文化においてワインの醸造が衰退したのと合わせて、樽の製作とその必要性は長く続かず、製作に必要な用語とともに次第に廃れていったと考えられる。そのために、結果として *dъly とともに

「樽製作用語」の多くは一部のスラヴ諸語にのみ辛うじて保持されることになった。ワイン作りが可能な土地の南スラヴ諸語に「樽製作用語」がよく保持されているのは、単なる偶然ではないかもしれない。一方で、スラヴ祖語の崩壊する頃、高地ドイツ語方言と接触したことで新たに樽・桶を表す借用語を取り入れ、*bъci, *bъčьka が後のスラヴ諸語に拡散したと考えられる。その結果、歴史時代にワイン樽を利用したスラヴ諸民族の間では、主としてこの借用語が用いられることになったのではないかと考えられる。

【註】

- ¹ 引き削りかんなは^{せん}鑿または両手かんなとも称す。なた状の湾曲した刃の両端に柄がつき、樽や桶の側板の表面を削るのに使用される（石村 1997, II 19 図, 20, 197）。
- ² 手斧は^{ちような}内側に湾曲し幅広の曲線を描いた刃を持ち、鏡板をはめ込む溝を切削するのに使用される（石村 1997, II 26, 27 図）。
- ³ アリ溝は板に溝を彫りこむ単純な構造である（石村 1997, I 101 図）。なお、突起部を穴に差し込み固定する「ほぞ」「ほぞ穴」は近世頃になってから普及した技術である。
- ⁴ 古代ローマ時代にはまだ主として蔓がたがとして使われていたので、締め木はなかったと考えるのが自然である（石村 1997, I 55 図, 59 図）。
- ⁵ ラテン語 pango の鼻音 -n- は現在語幹における古い接中辞要素であり、接頭辞付きの名詞 com-pāgēs がその本来の語基を示している。
- ⁶ チェコ語の語形 obáslo (< *ob-vez-slo) は接尾辞が *-dlo ではなく、*-slo または *-lo であったことを傍証しえる。
- ⁷ 閉鎖音に有声 (*vez- < *winĝ-) と無声 (vinc-) で不規則に交替するような例は、ラテン語またはスラヴ諸語において時折生じる現象であることが指摘されている（Pisani 1982, 155）。

【参考文献】

- Cato, M.P. *On Agriculture (De agricultura)* Cambridge. Harvard University Press. 1967.
Catullus, Tibullus, *Pervigilium Veneris*. Cambridge. Harvard University Press. 1976.
Ernout, A and Meillet, A. *Dictionnaire étymologique de la langue latine*. Paris. Klincksieck. 1979.
Forcellini, A. *Lexicon totis latinitatis*. Bologna. Alnaldo Forni. 1965 (1864-1926).
Leumann, M. *Lateinische Laut- und Formenlehre*. München. Beck. 1977.
Machek, V. *Etymologický slovník jazyka českého*. Praha. Academia. 1971.
Meillet, A. *Études sur l'étymologie et le vocabulaire du vieux slave*. 2nd edition. Paris. 1961.

- Pisani, V. "Lat. *vinciō*, slav. *vězati* und verwandtes" *Festschrift für Johannes Hubschmid zum 65. Geburtstag*. Bern. Francke Verlag. 1982. 155-156.
- Pliny (Plinius secundus G.) *Natural History (Naturalis historia)*. Cambridge. Harvard University. 1960-1968.
- Sławski, Fr. (red.) *Słownik prasłowiański*, tom 1-5. Wrocław. 1974-1984.
- Walde, A., and Hofmann, J. B. *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*. 1-2. Heidelberg. C. Winter. 1982.
- Варбот, Ж.Ж. *Древнерусское именное словообразование : ретроспективная формальная характеристика*. М. Наука. 1969.
- Георгиев, В. *Български етимологичен речник*. 1. София, Българската академия на науките. 1971.
- Рыбаков, Б.А. *Ремесло древней Руси*. The Hague. Mouton. 1969 (M. 1948).
- Словарь русских народных говоров*. т.6, М., 1970.
- Срезневский, И.И. *Словарь древнерусского языка*. М. Книга. 1989.
- Трубачев, О.Н. *Ремесленная терминология в славянских языках. Труды по этимологии. Слово. История. Культура* 3. М. Рукописные памятники Древней Руси. 2008 (1966). 391-799.
- Трубачев, О.Н. «Несколько древних латинско-славянских параллелей» *Этимология* 1973. М. 1975. 3-16.
- Фасмер, М. *Этимологический словарь русского языка*. 1-4. М. Прогресс. 1986.
- ЭССЯ: *Этимологический словарь славянских языков*. т.10, 29. М. Наука. 1983, 2002.
- 石村真一『桶・樽 I II』法政大学出版局、1997年。
- ウィリアム・ブライアント・ローガン (W. B. Logan) 『ドングリと文明』日経 BP 社、2008年。
- 松村紀代子「ヨーロッパの桶と樽－英国を中心に」小泉和子編『桶と樽』法政大学出版局、2000年。
- 佐藤規祥「スラヴ諸語におけるブドウ栽培術の用語とその文化史的考察」『西スラヴ学論集』第15号、2012年、41-70。
- 佐藤規祥「スラヴ諸語におけるワイン醸造術の用語とその文化史的考察」『スラヴ学論集』第17号、2014年、84-107。

Historical View of the Terms Used in Cask Production in Slavic Culture

Noriyoshi SATO

The timing when production of wine casks was first practiced in prehistoric Slavic Culture remains unknown. In this study on the basis of lexical evidence, I attempt to explore when production of wine casks had been developed in prehistoric Slavic culture.

On the one hand, there are two nouns formed from the same root which mean large casks in the Slavic languages. These nouns have, undoubtedly, been borrowed from an Old High German dialect just after the dispersal of Slavic people.

On the other hand, the noun with an archaic form, which means the large earthenware for wine, has been barely retained only in the marginal Slavic languages. This one is conceived to trace back to a fairly early proto-Slavic source, since its cognate noun with the same meaning appears in Latin. This fact suggests that production of the casks had become almost obsolete in the late proto-Slavic culture.

Thus, I have scrutinized the etymology of some terms that had presumably reflected the meanings of the tools and materials concerning the production of casks. It turns out that these terms in the Slavic languages correspond precisely to their cognate words in Latin. Such a lexical isogloss confirms that the terms of the production of casks in proto-Slavic language had been formed under close cultural contact with the proto-Italic language. In conclusion, these facts suggest that production of the wine cask could have been practiced in early proto-Slavic culture until vinification had become obsolete in late proto-Slavic times.